

平成 29 年度食品安全モニター課題報告  
「食品の安全性に関する意識等について」  
(概要)

I 調査の概要

1. 調査目的

食品安全モニターを対象とする調査から、食品の安全性に係る意識等について明らかにする。

2. 調査対象

食品安全モニター 444 名

有効回答数 379 名 (有効回答率 : 85.4%、回答者内識別紙参照)

3. 調査方法

インターネットによるアンケート調査

4. 調査期間

平成 30 年 2 月 13 日～3 月 2 日

5. 調査項目

- (1) 食品の安全性に係る危害要因等について
- (2) 食品安全委員会が行う情報発信について
  - ・加熱時に生じるアクリルアミド
  - ・カフェイン

## Ⅱ 結果の概要

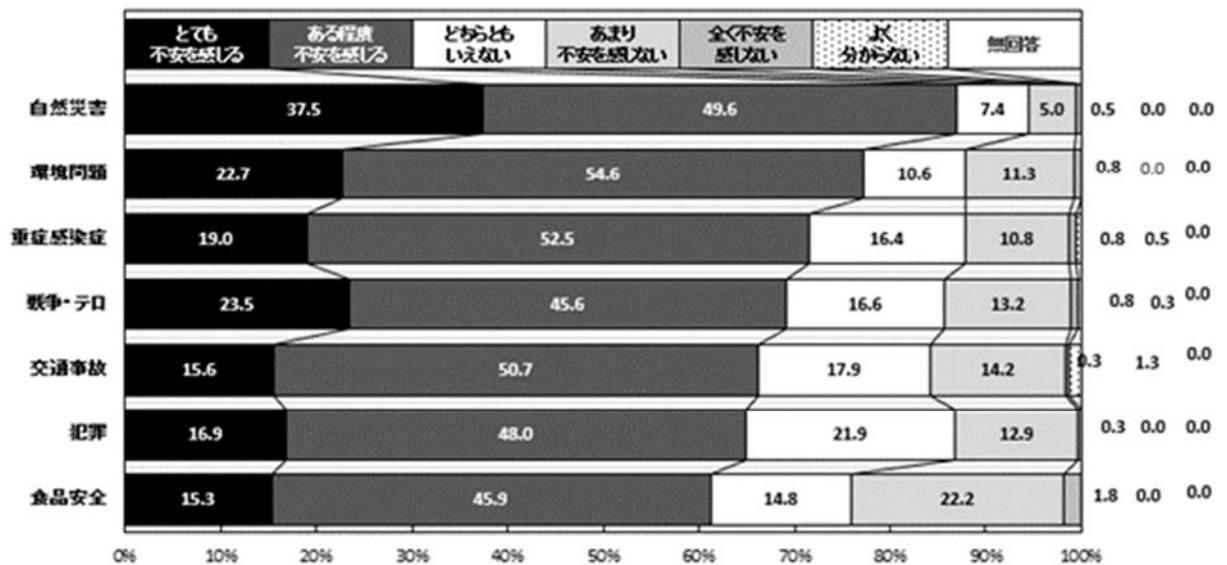
### 1. 食品の安全性に係る危害要因等について

#### (1) 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度

7つのリスク分野（環境問題、自然災害、食品安全、重症感染症、犯罪、戦争・テロ、交通事故）について、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、「食品安全」（61.2%）が最も低かった。

なお、「食品安全」の割合が最も低いのは3年連続である。

図1 日常生活を取り巻く分野別の不安の程度（n=379）

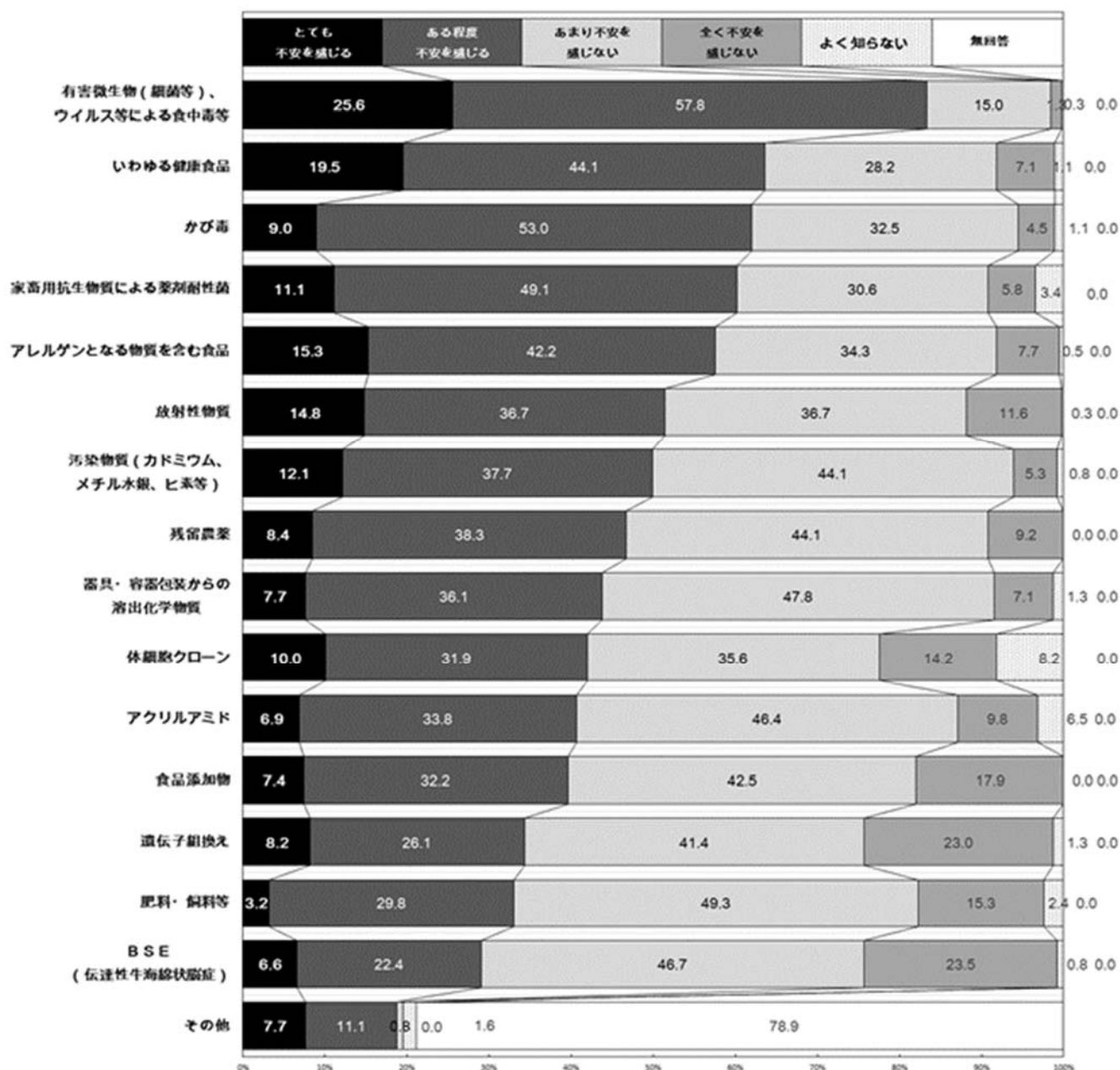


※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

## (2) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度

食品安全に関するハザードについて、「とても不安を感じる」又は「ある程度不安を感じる」と回答した者の割合は、「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」(83.4%)が最も高く、次いで「いわゆる健康食品」(63.6%)、「かび毒」(62.0%)の順であった。

図2 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度 (n=379)



※「とても不安を感じる」「ある程度不安を感じる」の合計が高い順に並べたグラフにしている。

### (3) 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別推移）

- ・「有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等」は6年連続1位であり、平成16年度以降、約80%で推移している。
- ・「いわゆる健康食品」は3年連続2位であり、平成23年度（第2回）以降、約60%で推移している。
- ・「放射性物質」は平成23年度には1位（第1回85.5%, 第2回80.3%）であったが、その後減少傾向にあり、今回調査では6位（51.5%）となっている。
- ・「汚染物質（カドミウム、メチル水銀、ヒ素等）」は平成16年度から19年度までは1位（91.7%）であったが、その後減少傾向にあり、今回調査では7位（49.9%）となっている。

表1 食品の安全性の観点から感じるハザードごとの不安の程度（年度別）  
 （「とても不安である」「ある程度不安である」の合計割合の上位7位）

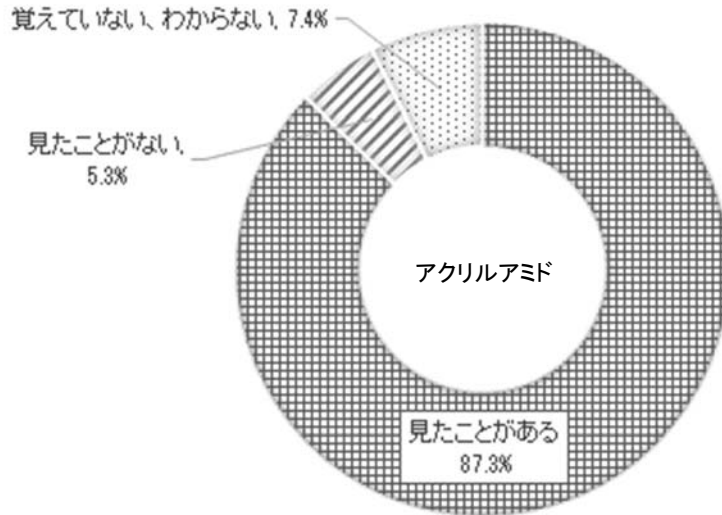
年度	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
今回調査	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(83.4%)	いわゆる健康食品(63.6%)	かび毒(62.0%)	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌(59.1%)	アレルギーとなる物質を含む食品(57.5%)	放射性物質(51.5%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(49.9%)
平成28年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(82.8%)	いわゆる健康食品(61.7%)	かび毒(61.5%)	家畜用抗生物質による薬剤耐性菌(59.1%)	放射性物質(56.5%)	アレルギーとなる物質を含む食品(55.7%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(51.9%)
平成27年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(75.7%)	いわゆる健康食品(64.4%)	放射性物質(58.4%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(53.2%)	家畜用抗生物質(51.8%)	残留農薬(51.3%)	食品添加物(48%)
平成26年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(78.5%)	放射性物質(64.1%)	いわゆる健康食品(64.1%)	残留農薬(58.8%)	家畜用抗生物質(55.4%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(53.6%)	食品添加物(50.4%)
平成25年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(80.8%)	放射性物質(67.5%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(62.6%)	いわゆる健康食品(62.6%)	残留農薬(61.5%)	家畜用抗生物質(59.5%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(50.7%)
平成24年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(79%)	放射性物質(74.2%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(64.5%)	残留農薬(63.4%)	家畜用抗生物質(57.3%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(55.6%)	いわゆる健康食品(55.5%)
平成23年度(第2回)	放射性物質(80.3%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(75.8%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(64.4%)	残留農薬(62.5%)	いわゆる健康食品(57.5%)	家畜用抗生物質(57.2%)	食品添加物(56.4%)
平成23年度(第1回)	放射性物質(85.5%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(76%)	残留農薬(60.3%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(58.5%)	家畜用抗生物質(56.4%)	肥料・飼料等(55.4%)	いわゆる健康食品(54.9%)
平成22年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(76.4%)	残留農薬(68.1%)	家畜用抗生物質(62.8%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(61.8%)	食品添加物(59.9%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(59.9%)	いわゆる健康食品(56.4%)
平成21年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(79.6%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(78.1%)	残留農薬(73.1%)	家畜用抗生物質(68.2%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(67.5%)	遺伝子組換え(64.6%)	食品添加物(62.5%)
平成20年度	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(75.3%)	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(74.8%)	残留農薬(70.6%)	家畜用抗生物質(64.4%)	器具・容器包装からの溶出化学物質(63.2%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(62.5%)	体細胞クローン(59.2%)
平成19年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(88.4%)	残留農薬(80.2%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(78.3%)	家畜用抗生物質(74.2%)	食品添加物(67.3%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(64.4%)	いわゆる健康食品(62.8%)
平成18年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(88.4%)	残留農薬(82.8%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(80.6%)	家畜用抗生物質(77.3%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(75%)	食品添加物(72.7%)	遺伝子組換え(69.4%)
平成17年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(90.2%)	残留農薬(86.4%)	家畜用抗生物質(80.4%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(79.3%)	遺伝子組換え(77%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(75.2%)	食品添加物(72.5%)
平成16年度	汚染物質(カドミウム、メチル水銀、ヒ素等)(91.7%)	残留農薬(89.7%)	家畜用抗生物質(83.5%)	有害微生物(細菌等)、ウイルス等による食中毒等(80.9%)	食品添加物(76.4%)	遺伝子組換え(74.7%)	BSE(伝達性牛海綿状脳症)(74.5%)

## 2. 食品安全委員会が行う情報発信について

### (1) 加熱時に生じるアクリルアミドに関する情報発信について

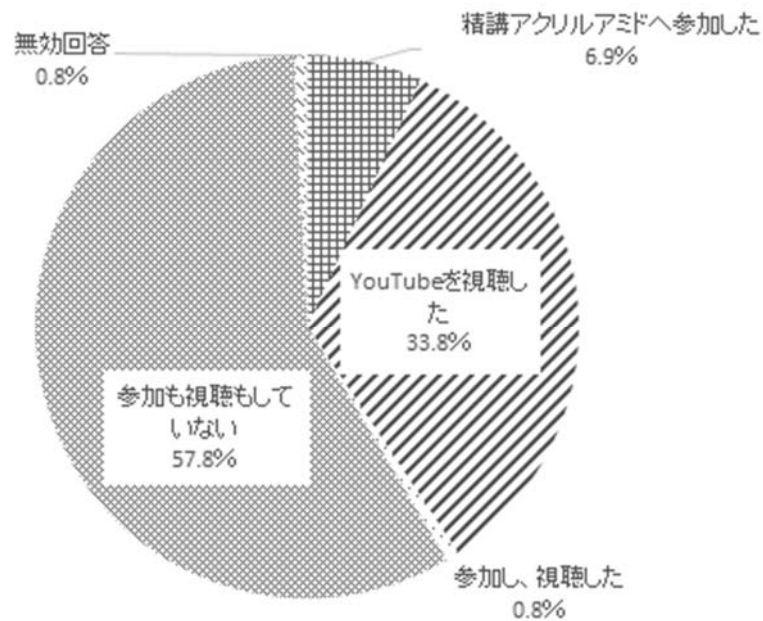
- ① 食品安全委員会がアクリルアミドに関して発信した情報を見たことがあると回答した者の割合は 87.3%であった。

図 3 - 1 食品安全委員会の情報発信 (n=379)



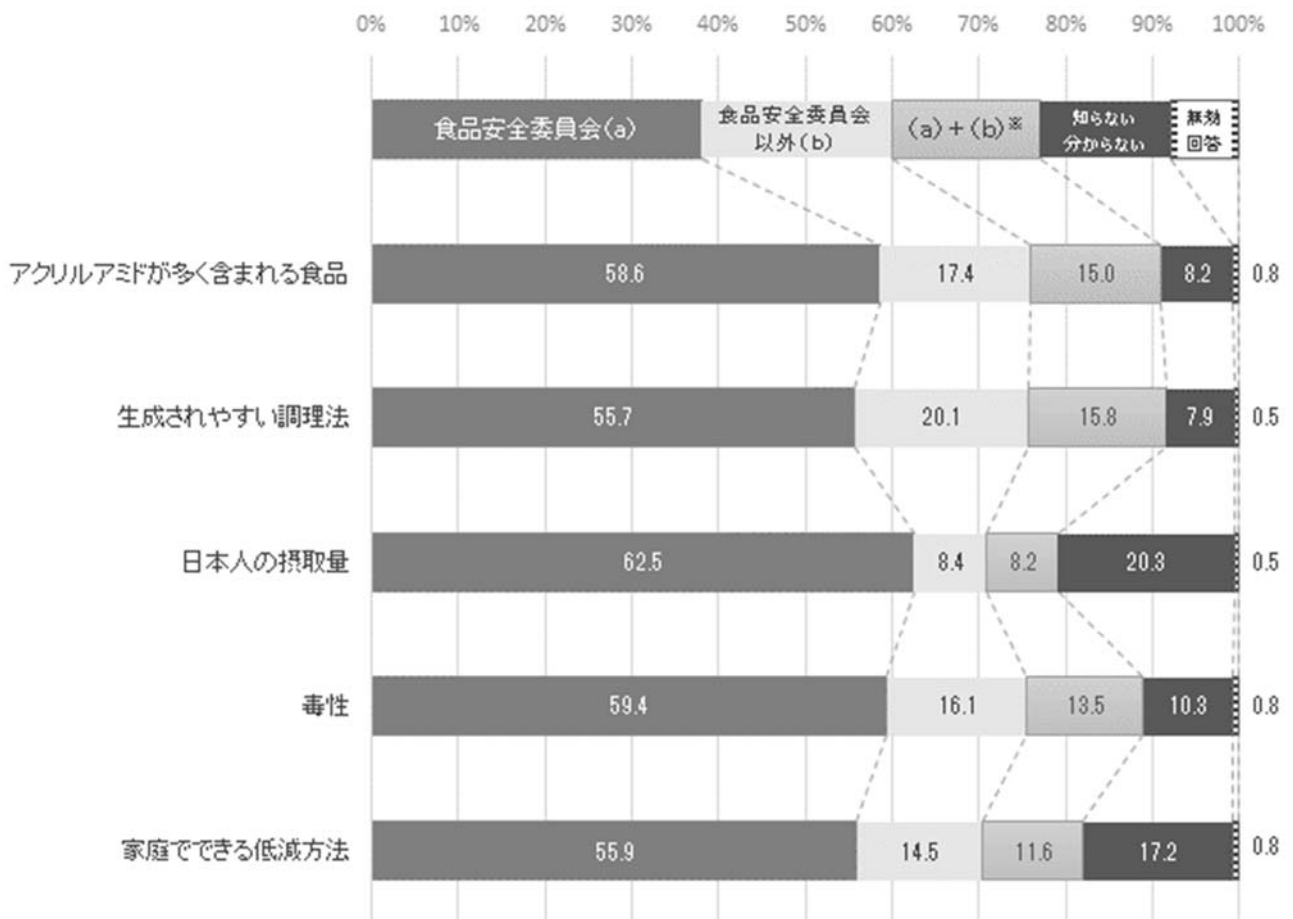
- ② 食品安全委員会が開催したアクリルアミドに関する講座（精講アクリルアミド）について、参加したと回答した者の割合は 6.9%、YouTube を視聴したと回答した者の割合は 33.8%、参加も YouTube 視聴もしていないと回答した者の割合は 57.8%であった。

図 3 - 2 講座の参加や YouTube の視聴 (n=379)



③ アクリルアミドに関する情報（含有量が多い食品、生成されやすい調理法、摂取量、毒性、家庭でできる低減方法）について、「食品安全委員会」から知ったと回答した者の割合が最も多かった（55.7%～62.5%）。

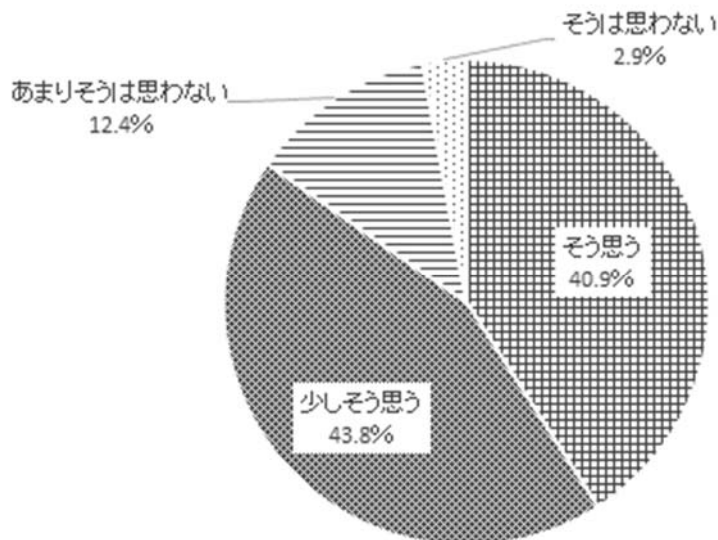
図3-3 アクリルアミドに関する情報をどこから知ったのか (n=379)



※ 食品安全委員会からも知ったし、食品安全委員会以外からも知ったと回答した者

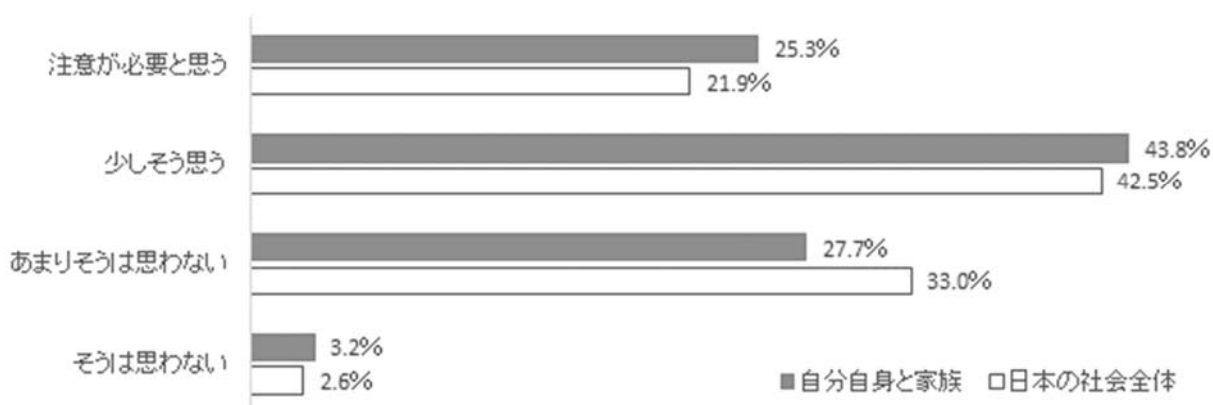
- ④ アクリルアミドの摂取量について、自分で気を付けることができると思う（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は84.7%であった。

図3-4 摂取量は、自分で気を付けることができるか (n=379)



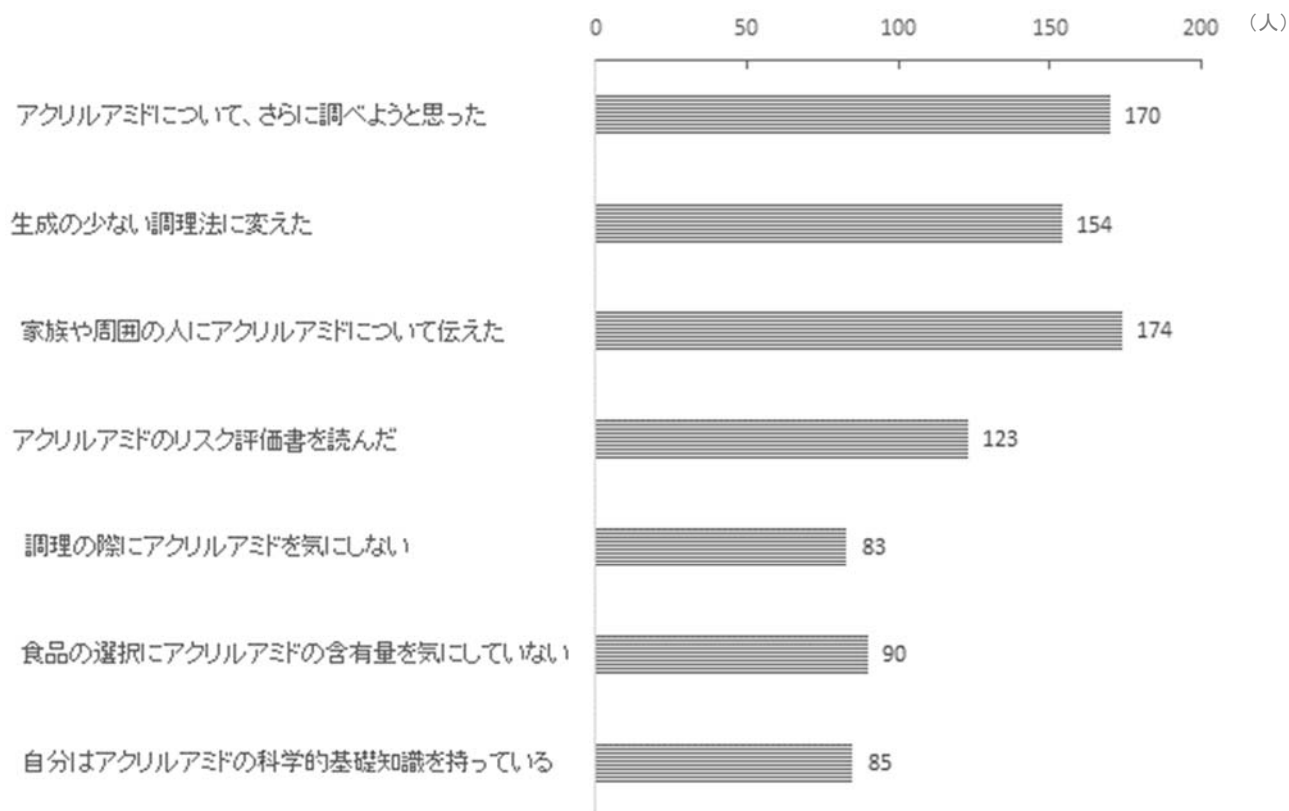
- ⑤ アクリルアミドについて、自分自身や家族にとって注意が必要である（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は69.1%、日本の社会全体にとって注意が必要である（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は64.4%であった。

図3-5 アクリルアミドの注意の必要性（自分自身と家族、日本の社会全体） (n=379)



⑥ アクリルアミドに関する情報を得た後の行動・気持ちの変化は、「家族や周囲の人に情報を伝えた」(174人, 45.9%)が最も高く、次いで、「さらに調べようと思った」(170人, 44.9%)、「生成の少ない調理法に変えた」(154人, 40.5%)の順であった。

図3-6 アクリルアミドに関する情報取得後の行動・気持ちの変化(複数回答可)

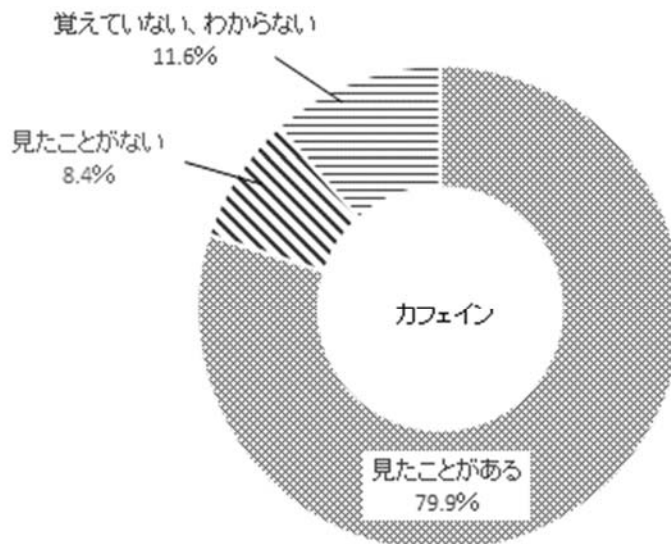




## (2) 「カフェイン」に関する情報発信について

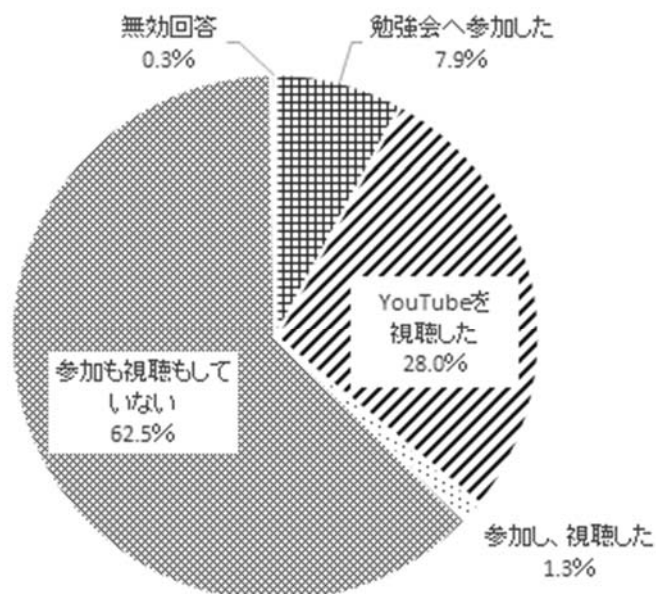
- ① 食品安全委員会がカフェインに関して発信した情報を見たことがあると回答した者の割合は79.9%であった。

図4-1 食品安全委員会の情報発信 (n=379)



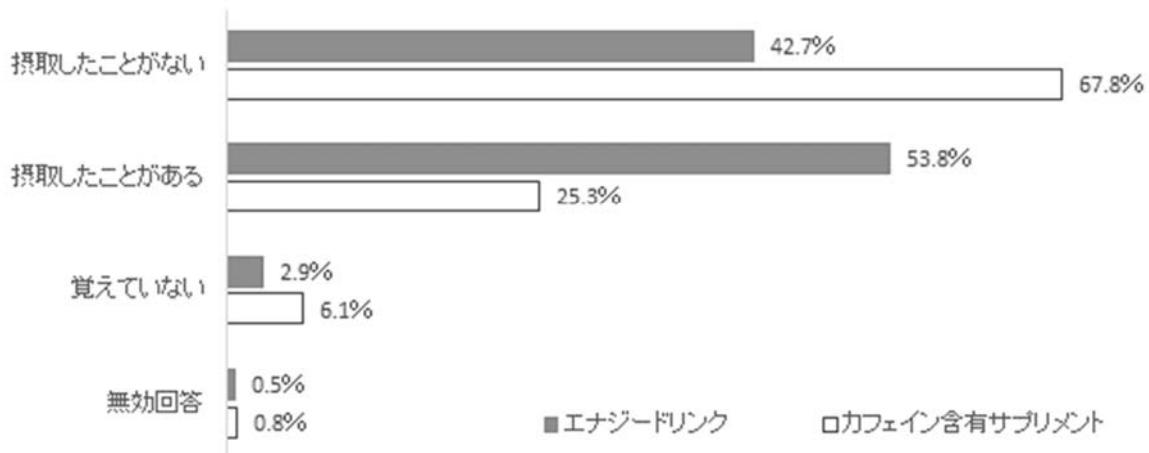
- ② 食品安全委員会が開催したカフェインに関する勉強会について、参加したと回答した者の割合は7.9%であり、YouTubeを視聴したと回答した者の割合は28.0%、参加もYouTube視聴もしていないと回答した者の割合は62.5%であった。

図4-2 勉強会への参加やYouTubeの視聴 (n=379)



- ③ カフェイン含有飲料・食品について、エナジードリンクを摂取したことがあると回答した者の割合は53.8%、カフェイン含有サプリメントを摂取したことがあると回答した者の割合は25.3%であった。

図4-3 エナジードリンクとカフェインサプリメントの摂取経験 (n=379)



- ④ 1ヵ月におけるカフェイン含有飲料・食品の摂取量は、エナジードリンクでは0本が77.6%と最も多く、次に1～3本の16.9%であった。また、10本以上と回答した者は1.1%であった。1ヵ月におけるカフェイン含有サプリメントの利用日数は、0日と回答した者が88.9%と最も多く、次に1～3日が5.3%であった。また、10日以上と回答した者は0.5%であった。

図4-4 この1ヵ月におけるカフェイン含有飲料と食品の摂取状況 (n=379)

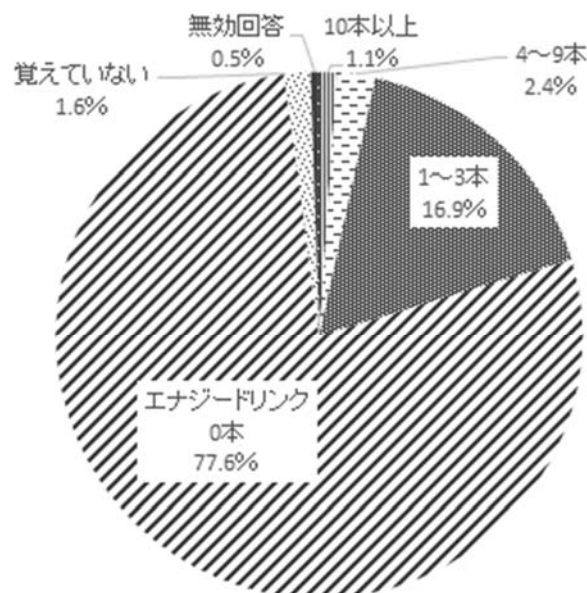
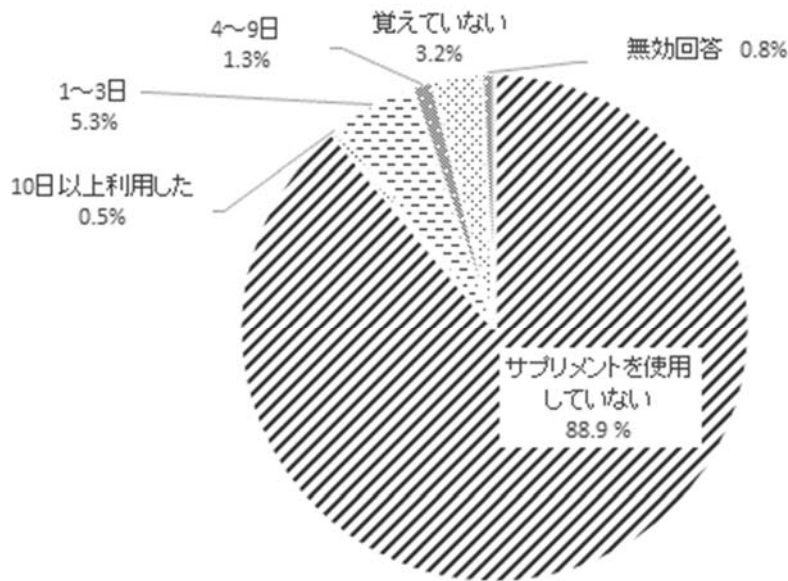
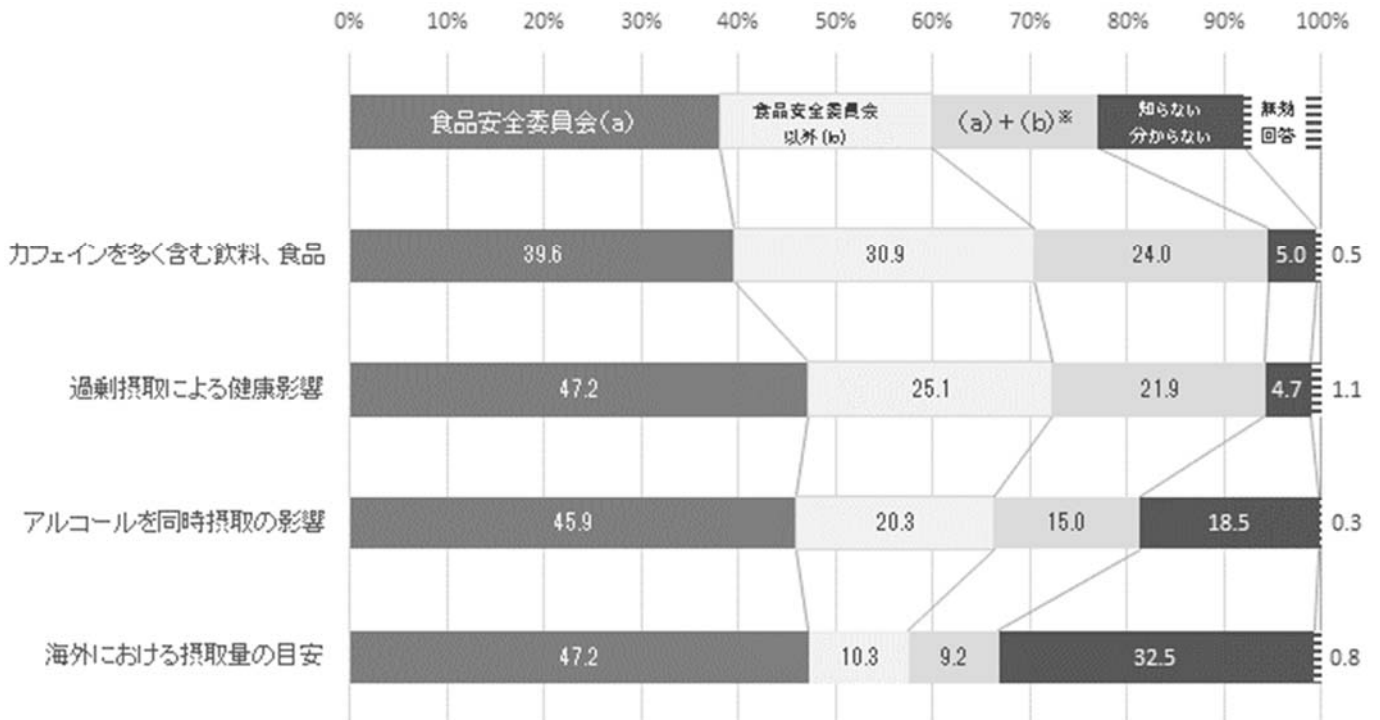


図4-5 カフェイン含有サプリメントの利用日数 (n=379)



⑤ カフェインに関する情報（含有量が多い飲料・食品、過剰摂取による健康影響、お酒と同時に摂取した時の影響、海外で設定されている摂取量目安）について、「食品安全委員会」から知ったと回答した者の割合が最も高かった（45.9%～47.2%）。また、海外で設定されている摂取量の目安について、「知らない、わからない」と回答した者の割合が32.5%であった。

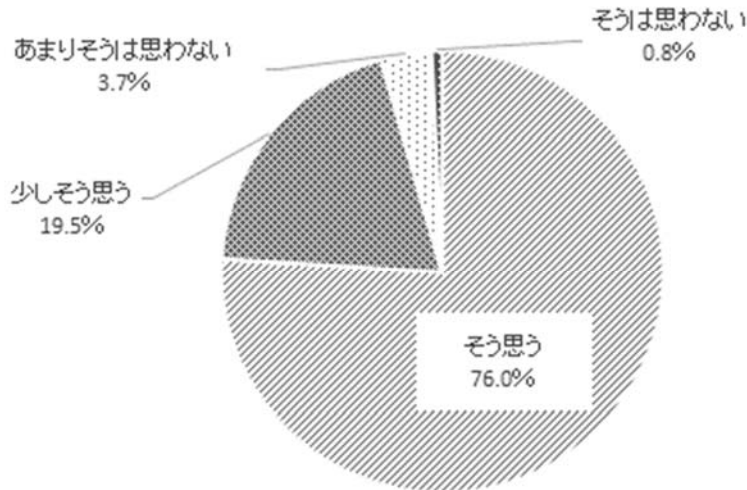
図4-6 カフェインに関する情報をどこから知ったのか (n=379)



※ 食品安全委員会からも知ったし、食品安全委員会以外からも知ったと回答した者

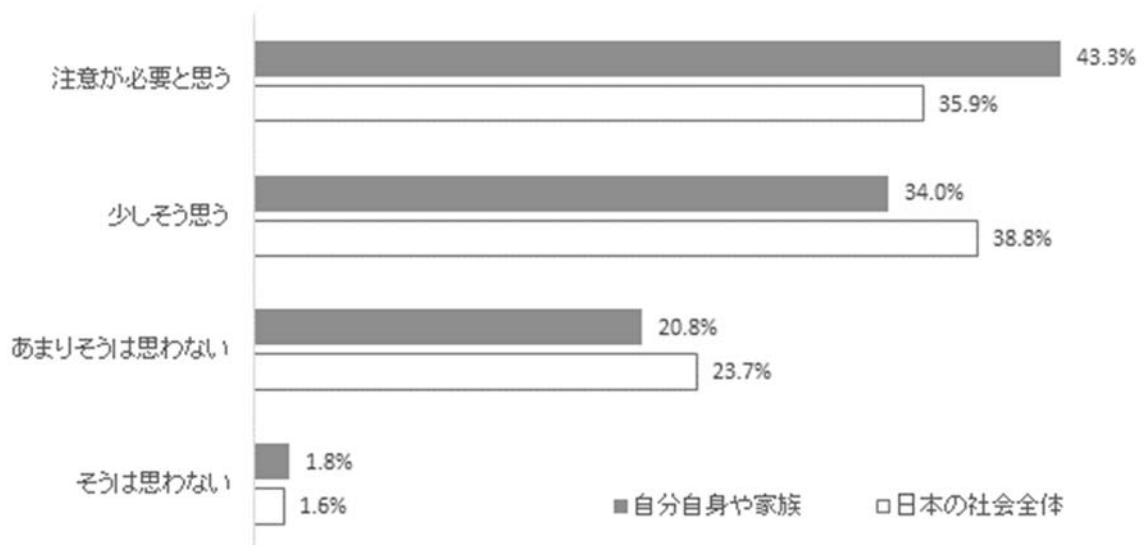
- ⑥ カフェインの過剰摂取について、自分で気を付けることができると思う（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は95.5%であった。

図4-7 カフェインの過剰摂取は自分で気を付けることができるか (n=379)



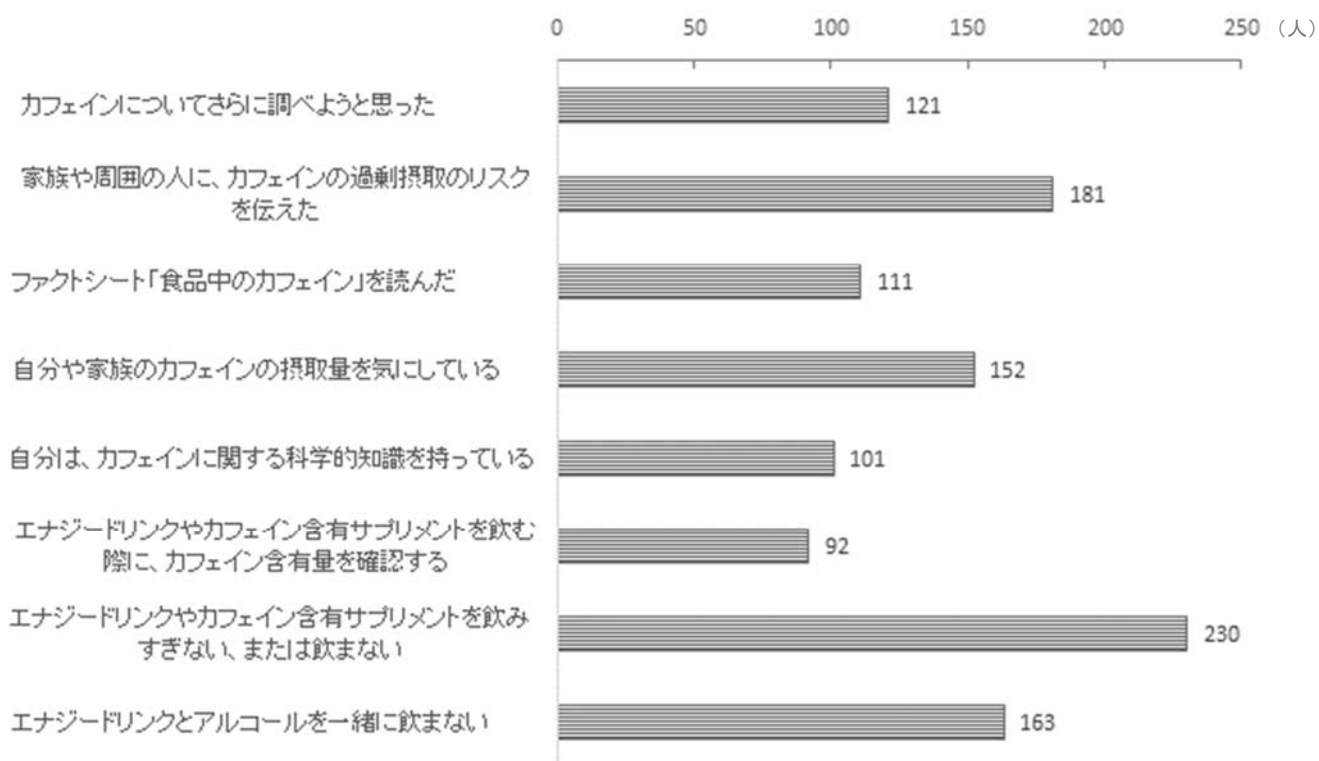
- ⑦ カフェインの過剰摂取について、自分自身や家族にとって注意が必要である（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は77.3%、日本の社会全体にとって注意が必要である（「そう思う」又は「少しそう思う」）と回答した者の割合は74.7%であった。

図4-8 カフェイン過剰摂取の注意の必要性（自分自身と家族、日本の社会全体）(n=379)



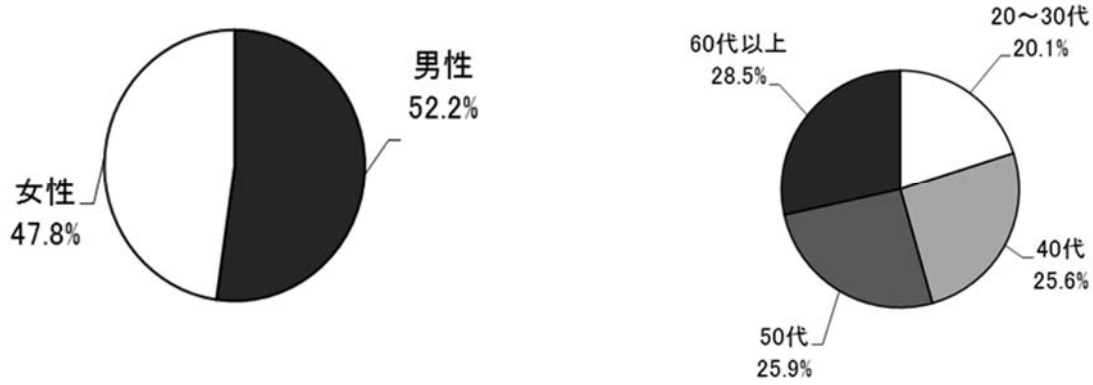
⑧ カフェインに関する情報を得た後の行動・気持ちの変化は、「エナジードリンクやカフェイン含有サプリメントを飲み過ぎない又は飲まない」(230人, 60.7%)が最も高く、次いで「家族や周囲の人にカフェインの過剰摂取のリスクを伝えた」(181人, 47.8%)、「エナジードリンクとアルコールを一緒に飲まない」(163人, 43.0%)の順であった。

図4-9 カフェインに関する情報取得後の行動・気持ちの変化(複数回答可)

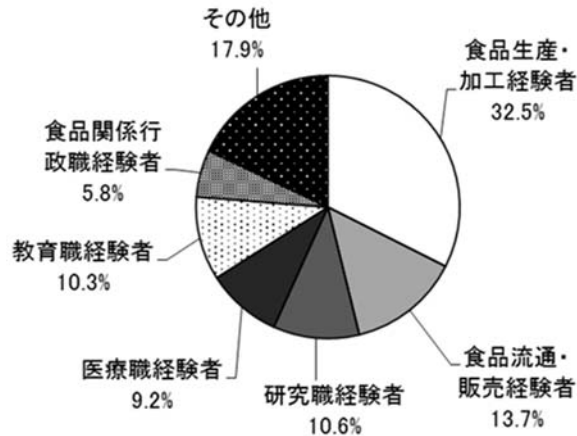


## 調査回答者の内訳

### ① 性別・年代 (n=379)

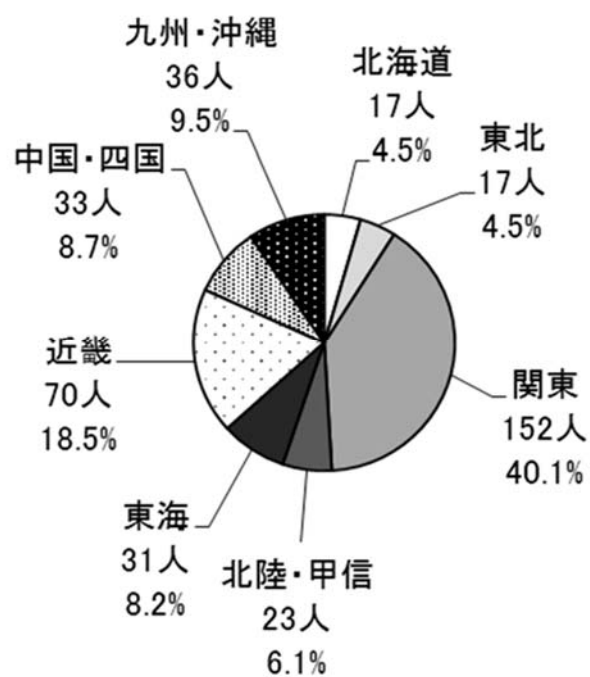


### ② 職務経験 (n=379)



	性別		年代区分				合計
	男性	女性	20~30代	40代	50代	60代以上	
食品生産・加工経験者	78人 63.4%	45人 36.6%	17人 13.8%	43人 35.0%	32人 26.0%	31人 25.2%	123人 100%
食品流通・販売経験者	36人 69.2%	16人 30.8%	5人 9.6%	12人 23.1%	20人 38.5%	15人 28.8%	52人 100%
研究職経験者	32人 80.0%	8人 20.0%	7人 17.5%	8人 20.0%	8人 20.0%	17人 42.5%	40人 100%
医療職経験者	13人 37.1%	22人 62.9%	3人 8.6%	9人 25.7%	12人 34.3%	11人 31.4%	35人 100%
教育職経験者	8人 20.5%	31人 79.5%	9人 23.1%	11人 28.2%	9人 23.1%	10人 25.6%	39人 100%
食品関係行政職経験者	13人 59.1%	9人 40.9%	2人 9.1%	1人 4.5%	2人 9.1%	17人 77.3%	22人 100%
その他	18人 26.5%	50人 73.5%	33人 48.5%	13人 19.1%	15人 22.1%	7人 10.3%	68人 100%

居住地 (n=379)



③ モニター継続年数 (n=379)

